いま、佐々木さんに学ぶ

日本原子力産業会議 専務理事 森 一久

我が国の原子力開発の初期、佐々木さんが文字通りいろはのいからの体制や政策づくり
に活躍されたことは周知のこと、昭和二十九年六月の原子力平和利用準備調査会（内閣）
から、原子力基本法などの基本法制、原子力研究所等々の機構の設立など、正力松太郎副
総理（当時）らの先覚者の構想は、佐々木さんを頂点とする経審庁出のグループによって、
学界、業界との対話を大胆に進めながら、一つ一つ具体化されて行った。

私は当初学界の若手連とともに平和利用の進め方に注文をつける側にいたが、日本原子
力産業会議（昭和三十一年略稱、原産）が発足してからは、橋本清之助事務局長のもとで、
民間の意見をまとめては新しい組織や法律の制定等を訴える提言を次々と政府側に持込ん
だわけであるが、その受け手が正に佐々木さんだった。その多くは、在来概念を超えた
もので、縄張りからみても各省庁にまたがるものばかり、佐々木さんは持前の朴訥、磊落、

粘りで、激する相手を結局は陥落させ、肉は切られても骨は残った形で実現にこぎつけた
ものであった。

なかんづく、正力委員長に石川一郎氏、有澤廣巳氏、湯川秀樹氏、藤岡由夫氏と錚々た
るメンバーが揃った初代の原子力委員会の一挙手一投足は、世間の注目の的であり、新聞
記者が実際に隣室に忍び壁に耳をつける始末。海外派遣や参与などの人事案件でさえ、ス
クープの種としてねらわれた。最初の参与の名簿が一面トップでスクープされたときなど、
正力大臣から漏洩の「犯人探し」を命じられた佐々木初代局長が困りはてた末「犯人は大
臣御自身、凶星でしょう」と一件落着……、とこんな一席の講談ともいえる「逸話」も少
なくなかった。

同氏の「本場」の秋田弁はつとに有名だが、これだけは国会に移られてからも変わるこ
となく、激しい論戦の中でも貴重な清涼剤となりつづけたようである。秋田といえば、原
産の初代会長菅禮之助氏も、また中曾根康弘氏らとともに最初の原子力予算計上を英断さ
れた斉藤憲三氏もそうであった。また、原子力の草創期に活躍された方々には佐々木さん
同様旧満洲の関係が多いが、このような人脈やその気概が、原子力のような国家百年の計
にかかわるものの推進に果してきた役割は小さくないものがある。

佐々木さんの無縫な性格は、開発初期のいわば八方破れの取組み方の一つの象徴でもあった。当時与野党一致して原子力推進で、今とは世間の風潮もちがってはいたが、前述のようなほげしい関心にさらされて随分と批判もされ叩かれもした。

しかし、当時の開発の態様には一種居直ったような直截さが漂っていて、国民は、そのことに温かさと親しみを感じていたのかもしれない。どうやらその後三十年の歳月は、原子力界を一つの整然とした、しかし冷たく親しみにくい姿に変えたのではないだろうか。今日の状況がそうだとすれば、これは最近の反原子力運動に格好の土壌を提供していると思われ、我々はこの面でも初心に立戻らなければならないのであろう。

いま佐々木さんの遺されたものを更めてみつめながら、心から御冥福をお祈りするものである。